

俺らの問題

山岡 雅博(本学教職研究科教授 臨床教育学)

先日、教え子が訪ねてくれた。30代半ば、中学の教師をしていたころの卒業生で、Aさんとは30年ぶりの再会だった。彼は地方都市の研究機関で環境に関する研究職に就いていた。

彼がいた中学3年のクラスには不登校の生徒が複数おり、男女の仲も良くなく、さまざまなトラブルが続いていた。彼はクラスで正義感の強いリーダーとして学級委員に選ばれていた。その正義感ゆえに、高校受験の内申点を稼ぐ目的で生徒会の委員になるような生徒に対しては、あからさまに敵意を示すこともあった。思春期まっただ中の彼は激しやすく、誤解されることもあった。

体育祭前には「明日は、朝練をします。7時半には集合してください」と言っていた体育祭委員を含んだ男子たちが、合唱祭の練習ではふざけっぱなしで、練習に協力しようとしなかった。合唱祭前日の練習で、業を煮やした女子たちが怒り出した。どちらかというとおとなしく発言力の乏しかった彼女たちが、意を決して男子の問題を指摘し始めた。司会をしていたAくんは「陰で言わずにはっきり言ってくれ」と言い放った手前、彼に対する問題点の指摘にも黙って聴いていた。女子たちが蜂起した話し合いは長引き、最後の練習に十分には時間をかけることができなかったが、このことに文句を言うものはいなかった。

当時、中学生の不登校生徒は5万人を超えており、全生徒に対する割合は1%を少し超える程度だったが、そのクラスには3~4名の不登校生徒がいた。保護者とは定期的に連絡を取り合っていたが、生徒によっては、家庭訪問しても私と会ってくれないこともあった。その当時、学校行事の取り組みやクラスの問題は、必ず班長会に議題として取り上げてもらっていた。私は「最近では、私に会ってくれない人もいます。進路決定の時期も近く、きっといろんな不安もあるはずなのに」と、担任としての不安な思いを語った。不登校の人たちが抱えている不安や葛藤は、きっと学校に来ているみんなの不安や葛藤と別物ではないだろう、と付け加えた。Aくんたち班長会のメンバーは合唱祭の話し合いなどを経て、クラスの問題は

「俺らの問題だ」と考えるようになっていた。そして、彼らはクラスに「クラスノート」を回すことを提案した。3冊のクラスノートが座席の奇数列から回された。Aくんら3人のリーダーが第1ページにそれぞれのことばで、「進路決定のこの時期に本音を綴り、支え合えるクラスになろう」と呼びかけた。2学期のことだった。やがて、クラスノートにはため込まれていた不安や葛藤などの本音が飛び交うようになっていった。不登校の生徒たちにも届けられ、書けない生徒も自分の部屋に持ち込み、必ず仲間のメッセージを読んでいったという。クラスのトラブルは減っていき、かつてのとげとげしかったクラスの雰囲気は穏やかで温かいものになっていった。一人ひとりの不登校の生徒に対しては、担任の私が他の生徒たちに依頼するような働きかけはしなかった。生徒たちがそれぞれに関わっていったり、班長会が提案して訪問したりしていった。その結果、卒業式には全員がそろうことができた。思春期の葛藤を仲間と共有し、一人ひとりが自分自身と向き合い、成長したように思う。

私にとって不登校研究のきっかけになった思い出深い実践だったので、Aさんに当時のことを聞いてみた。こちらの期待に反して「クラスのことはあまり覚えていません。先生の理科の授業と進路のことでお世話になったことはよく覚えていますが」という答えが返ってきた。担任の山岡にやらされたのではなく、「俺らの問題」として彼らが主体的に仲間と関わり、支え合ってきたことで、彼らにとっては中学生生活の日常にすぎなかったようだ。生活主体としての彼らが生活のなかでゆっくり成長しているとき、教師は彼らをとりまく環境の一つでしか過ぎなかったのであろう。

Aさんは地域の高校生の環境学習に関わるようになり、環境教育のおもしろさに気付いたという。彼に当時の学級通信を綴じた冊子をわたした。ようやく当時を思い出したようで「恥ずかしいです。読む勇気が出ません」と言って帰って行った。後日、「夜な夜な、一人で読みました」というメールが届いた。